JIM-NET便り

2016年3月28日（月）

特定非営利活動法人
日本イラク医療支援ネットワーク
〒171-0033 東京都豊島区高田3-10-24
第二大島ビル303 ☎03-6228-0746

シンジャールの娘・ナブラス

JIM-NET 事務局長　佐藤真紀のイラク現地レポート

JIM-NET 事務局長・佐藤真紀は 2015 年末～ 2016 年初めにかけて鎌田實 JIM-NET 代表理事とともにイラクを訪問しました。写真は 2015 チョコ募金の缶の絵を描いてくれたナブラスさん。2015 年 9 月・佐藤撮影。

◆「いのちの花」物語のあるチョコレート。
ポインセチアを描いたナブラスの物語です。

2014年8月3日の朝、40万人いたというシンジャールの町は、あっという間にイスラム国に制圧されてしまった。治安を守っていたはずのクルド自治政府の軍隊は既に撤退してしまっていたからだ。イスラムに改宗するか、死を選ぶか。

5万人以上がシンジャール山に逃げた。8月8日、アメリカがついに空爆を開始。多国籍軍が水や食料を空中から投下。イラク軍も救援のヘリを飛ばしたが、群がる避難民にヘリが墜落する惨事も起きた。

シリアからクルド部隊（YPG）が「イスラム国」の包囲を破り、シンジャール山とシリアの回廊をつなげたために、多くは陸路でシリアに逃れてから再びイラクへもどってきた。5000 人以上が殺され、女子はイスラム国に連れ去られ性奴隷にさせられた。

◆ 2015 年 12 月 28 日（曇り時々晴れ）

鎌田代表と私は日本からトルコ経由でアルビルに到着するなり、3時間かけてドホークへと向かった。我々は、シンジャール山にまだ残っているという避難民のために、粉ミルクと紙おむつを届けることになった。先にドホーク入りした榎本と合流。ドホーク県庁と、警察の許可を取り付け、保健省の役人に同行してもらいシンジャール山を目指した。12月29日、夜明けとともにドホークを出発する。途中ラビアという町を通過するが、米軍の空爆で激しく町は破壊されていた。

建設途中の病院は、「イスラム国」が占拠していたので、米軍が空爆して破壊したという。「イスラム国」はいなくなったが、地雷が仕掛けてあるかもしれず、人はまだ戻れないという。

シンジャール山の頂上には小さなクリニックがあり、軍服を着た看護師がいた。ハンサ・ミラーニーさん。

彼女はシリア難民で、私たちが支援しているダラシャクラン難民キャンプで避難生活をしていたが、ヤジディ教徒の悲劇を聞き、志願してイラク軍のヘリコプターにのりシンジャール山に駆

NEWS

【イラク現地レポート】シンジャールの娘・ナブラス……佐藤真紀（JIM-NET 事務局長）P1
イラク現地報告（バグダッド・バスラ）……榎本彰子（JIM-NET アルビル事務所駐在）P3
「INORI」「いま、ここにいる私たち」「いのちの花展」～ JIM-NET のイベントから……崔　麻里（JIM-NET イベント担当）P4
【ヨルダン現地報告】シリア人自身の将来のために……福田直美（JIM-NET ヨルダン事務所長）P6
【東京事務所から】…『シリア・内戦と人権を考える』シンポジウム開催……内海旬子（JIM-NET 海外事業担当）　P6
【福島支援事業報告】…福島原発事故から５年、市民放射能測定所のいま……佐藤公昭・小松真理子（JIM-NET 福島事業担当）P7
2016 チョコ募金・ご協力ありがとうございました　鎌田實（JIM-NET 代表理事）芦澤礼子（JIM-NET チョコ募金担当）P8
新スタッフからご挨拶……岩崎ルミ P8

けつけたのだ。2014 年の 9 月に山に入ってから一度も戻っていない。

「妊婦さんが山に避難していたんです。靴も履いていない。私は自分の靴を脱いではかせてあげました。」

鎌田代表が、「なぜ軍服を着ているの」と聞いた。

「私の気持ちは、ペシュメルガ(※)と同じ。闘っているんです。」

なだらかな山。北側の斜面にはテントが点在している（写真下)。16000 人がいまだに避難生活をしている。南側を見下ろすと、あそこには、「イスラム国」がまだいるらしい。冷たい風が吹き上げてきた。

＊この日 JIM-NET が行ったのは、缶ミルク 840 缶、おむつ 20 個入り 100 パックなど約 60 万円相当の支援だった。1 月からはシンジャール山のモバイルクリニックに毎月 2000 ドル分の資金援助している。
※ペシュメルガ：自治政府の治安部隊

◆ 12 月 30 日（雨）

ナブラスに電話をする。母親に「会いに行きたい」と伝えると、「いいですよ」といってくれた。

私がナブラスに初めて会ったのは、2014 年の 8 月の終わり。あの頃の私は、日本で毎朝 BS の国際ニュースを見て、気持ちばかりが焦っていた。7 月に、アンバールの救援活動を行って帰国したばかりだったが、シンジャールの陥落を知り、急きょイラクに戻ることにした。特にドホークの町中には、学校や、空き地に、多くの避難民がテントを張っていた。その大半が、シンジャールから避難したヤジディ教徒である。日本のマスメディアは、「イスラム国」の残虐性ばかりを報道し、支援の呼びかけなどは、一切記事にしてくれない。40℃から 50℃近くまで気温が上昇するなかで、せいぜいペットボトルの水を配るくらいの支援しかできず、まさに焼け石に水だった。一方で、ドホークの病院には、モスルなどから避難してくる患者も増えて薬が足らないというので、急きょ抗がん剤を持っていった。がん病棟を訪ねると、ナブラスがいたのだ。

彼女は、シンジャールが陥落する前に、ユーイング肉腫というガンだと診断された。本当ならば、シンジャールから一番近いモスルの病院に行くのだが、すでにモスルは、イスラム国に支配されていたので、わざわざドホークの病院で検査を受けた。

イスラム国が襲ってきた時、彼女は、ピックアップの荷台に十数人の家族らと一緒にのって病院があるドホークを目指した。知り合いが、建設中の建物を教えてくれて、そこでとりあえず暮らすことになった。父親はペシュメルガだったので、家族を無事に避難させると、戦場へと戻っていった。

12 歳のナブラスは、いつも慎み深く、はにかむように微笑んでいた。

2014 年の年末には、ナブラスを元気づけようと、鎌田代表を連れて、ナブラスの家で炊き出しをやった。僕はおいしい年越しラーメンを食べさせてあげたかった。ナブラスは魚が好きだというので、魚も買った。ラーメンのスープを買いに、ドニアというレストランにいくと、オーナーが張り切って、ケバブやらいろいろとサービスしてくれた。

寒い冬を越せるかが勝負だった。

難民キャンプがあちこちにでき始めていたが、そんなドホークにも、いくつか巨大モールができていた。募金箱がレジにおいてあり、それは難民支援ではなく、ペシュメルガへの支援だった。私たちは、輸入したポインセチアを見つけ、ナブラスに描いてもらうことにした。

みんなで、ご飯をたべ、楽しい一日だった。アルビルに向かう途中で日が暮れ、ちょうど日本は新年を迎えた。2015 年が始まった。僕たちは、車の中で一年の抱負を語り合った。

「平和な一年を！」一体この言葉を僕らは何度繰り返しているんだろうか。現実は厳しい。

それからちょうど一年。

あいにく、朝から雨が降り、道はぬかるんでいる。

ナブラスの部屋は一階に移されていた。薄暗い部屋でナブラスが衰弱して眠っていた。

鎌田が「昨日僕たちはシンジャールに行ってきたよ。シンジャールに戻れるといいね。シンジャールに戻ったら何したい？」

「学校に行きたい」彼女は小さな声で答えてくれた。「勉強したい」。

彼女が描いたポインセチアのチョコを渡すと、ナブラスは一粒食べた。おいしかったのだろうか。もう一度、手を伸ばし二粒目を食べた。

鎌田が、MRI の写真を見る。

「肺にも多発してるんだ。横隔膜の下も…厳しいね…」

帰りがけに鎌田が父親に説明した。

「手術しても助かる可能性はないでしょう。彼女はシンジャールに帰って、学校に行きたいといっています。家族みんなが同じ夢を持ってあげることが大事だと思います」。

父親は、涙を浮かべて「わかりました。彼女にたくさんの愛情を与えるつもりです」と答えた。

その後気温は冷え、雨はやがて雪へとかわり、山は白くなっていった。

◆ 2016 年 1 月 9 日 （雨のち晴れ）

その日も朝から雨が降っていた。

ナブラスは薄暗い部屋でさらに衰弱し、時折、痛みに耐えられないのか悲鳴を上げて泣き叫ぶ。お母さんが抱きしめると落ち着いた。

私は、9 月に写した写真を A4 サイズに伸ばしたものを彼女に手渡した（1 ページの写真)。

「一生懸命撮ったよ。気に入ってくれる？」

外に出ると、雨が上がり、ナブラスの粗末な家が黄金の夕日で輝いていた。鳩たちが空に向かって元気よく飛び立っていく。こんなに平和な光景なのに、ナブラスは死んでいくのだ。

そして、1 月 15 日、ナブラスは逝った。

2016 年1月 9 日のナブラスさん。写真撮影：安田菜津紀（フォトジャーナリスト）

◆ 2 月 22 日　（曇り）

ナブラスの墓の前で

「ここは、私たちシンジャールを追われたものに与えられた共同墓地なんです。」ナブラスを思い出し、嗚咽していた母親が語り始めた。次第に力強い演説のようになっていった。

「ナブラスはとても美しく、やさしい子でした。私たちはヤジディ教徒ですが、イスラム教、キリスト教、すべての宗教の人たちが、優しくしてくれました。病院でもみんな、助けてくれました。ヤジディ教徒だからと差別されることはありませんでした。私たちの文化では、毎月、ご飯を作ってお墓に持て行きます。一年後には、立派なお墓を作ってあげます。私たちは幸せなんです。なぜならば、多くのヤジッド教徒の女の子は、（イスラム国に連れていかれ）殺され死体すらも帰ってきていない人がたくさんいるからです。ナブラスは、賢い子です。訪ねてきてくれたあなたたちの名前を決して忘れることはないでしょう。」

娘の面倒を見るためにしばらくペシュメルガを離れていた父は、再び戦場に向かうのだろうか？

イラク現地報告（バグダッド・バスラ）

イラクでは、首都バグダッドを含め各地で爆弾事件が相次ぎ、2016 年 2 月だけでも犠牲者は 670 人にのぼりました。その 2/3 は一般市民と報告されています。治安悪化に伴い、経済的・社会的にも不安定な状況が続き、銀行から現金を引き出せず、公務員の給与が支払われなかったりカットされたり、医療を含めた公共サービスがより行き届かなくなっています。治安の問題で日本人スタッフが活動できないバグダッドとバスラですが、そういった地域では現地スタッフが小児がんの子どもたちに寄り添って支援を行っています。

■アブ・サイード（バグダッド）

医薬品支援を中心に、2 つの病院をサポートしています。しかし、バグダッドで入手できない薬もあり、アルビルなど他の都市で入手して送ることもあります。院内学級支援では、週２・３日 JIM-NET 院内学級を実施し、子どもたちに勉強を教えたり、遊べる空間を提供しています。比較的治安が良い時にはピクニックなど外出をし、屋内で誕生日会や絵の展示会やその他のイベントを開催しています。バグダッド近郊には、国内避難民用のキャンプもできており、貧困家庭のがん患者も避難生活を送っています。そういった避難民には、緊急物資支援も行っています。

■イブラヒム（バスラ）

バスラでも、不足している医薬品の支援を中心に、小児がんの子どもたちが通う病院をサポートしています。院内学級は毎日実施され、病気の子どもたちも勉強を続けられています。また、院内学級室は病室と雰囲気も変わり、患者の精神的ケアにも役立っています。例えば、病室で注射など治療を拒む子どもが、院内学級では落ち着いた空間のため素直に治療に応じてくれるケースもあります。その他にも、お誕生日会などのイベントや小児がんを克服した元患者によるセッションも実施されています。貧困患者支援として、毎月 15 ～ 20 人の貧困家庭を訪問し、継続して治療が受けられるよう交通費などの支援しています。また、治療中の子どもたちが感染症にかからないように、感染症対策キット（マスクやアルコールジェル）を配ったり、院内や家庭での対策を紹介しています。

文責：榎本彰子（JIM-NET アルビル事務所駐在）

「INORI」「いま、ここにいる私たち」「いのちの花展」～ JIM-NET のイベントから～

崔　麻里（JIM-NET イベント担当）

2015 年の年末、シリーズ「戦後 70 年企画」の集大成として二つの大きなイベントが続きました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

★ 11 月 6 日､チョコ募金のキックオフも兼ねて開催した「INORI ～戦争で失われたすべての “ いのち ” のために」（於：豊島公会堂）は、歌手のクミコさん、SADAKO　LEGACY 副理事長（「原爆の子の像」モデルの佐々木禎子さんの甥）でシンガーソングライターの佐々木祐滋さんをメインゲストに迎え、女優の斉藤とも子さんが司会を引き受けて下さり、歌とトークの贅沢なチャリティ―イベントとなりました。「平和の鐘」プロジェクト（注：次号でご紹介します）でお世話になっている秋田市の熊谷恭孝さん、クミコさんが歌われる「広い河の岸辺」を作詞され、ケーナ奏者であるやぎりんさんもご登壇下さり、心温まる時間をたくさんの来場者の方々と過ごすことができました。普段の JIM-NET のイベントではあまり見かけない小中高生のみなさんも座席を占めて下さり、多くの感想を寄せて下さいました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

★ 12 月 26 日には、「いま、ここにいる私たち」と題し、関野吉晴さん（探検家･武蔵野美術大学教授）と村田信一さん（写真家）をお迎えし、立教大学キリスト教学科との共催で映画上映会と鼎談を開催しました。安保法案、戦争と平和、難民、移民、いのち…と話題が広がりました。安保法案、戦争と平和、難民、移民、いのち…と話題が広がりました。

異なる国に住んでいても「いま」という同じ時間を生きている私たち。それぞれの「平和」のために想像力とともに考え行動することを気づく場となりました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

★年が明けて 2016 年 2 月 12 日からの 5 日間は、ギャラリー日比谷のご協力により、「いのちの花展」を開催いたしました。イスラム国から逃れたヤジディ教徒の子ども達が描いた絵画をはじめ、チョコ募金の原画とキルト展示、ヨルダンとイラクでの活動紹介、チョコ色のユニフォームを着たサカベコ等、充実した展示となりました。初日前日に朝日と日経新聞に写真入り記事が掲載されたせいか、例年より男性の来場者が増え、背広姿の方々がハウラのタオルセットやサブリーンのカード、チョコ缶を手にして下さった光景は忘れられません。

最後になりましたが、各イベントでお世話になった多くの皆様方にこの場をお借りして御礼申し上げます。

◆ INORI ～戦争で失われたすべての“いのち”のために（2015 年 11 月 6 日@豊島公会堂）

★「INORI」司会者・斉藤とも子さんからのメッセージ

―チャリティコンサートによせて―

JIM-NET スタッフの崔麻里さんのご縁で、司会をさせていただきました。

原爆被爆者の方々と交流があるので、劣化ウラン弾の影響で小児がんや白血病になった子どもたちのことは、とても他人事とは思えませんでした。そして、そんな子どもたちの医療支援を続けておられる鎌田先生や佐藤真紀さんの活動には以前から注目していましたから、お誘いに大感激！

勉強不足の私に司会が務まるのかドキドキしながらも、クミコさんと佐々木祐滋さんのお話と歌に緊張も忘れるくらい惹きこまれ、自然体の鎌田先生のお話には、時に笑いながらも胸が熱くなりました。現地で直接子どもたちと触れ合い続けてこられたからこその説得力。会場の皆様、北海道からキルトを届けて下さった高橋さんや、スタッフの皆様の熱い思いに包まれて、この「祈り」は必ずいのちに届くと、心が震えました。

ほんとうに、ありがとうございました。

写真左：司会の斉藤とも子さん
写真右上：クミコさん（左）とケーナ奏者やぎりんさん（右）
写真右下：佐々木祐滋さん（左）と鎌田實 JIM-NET 代表理事（右）

◆いま、ここにいる私たち（2015 年 12 月 26 日@立教大学太刀川記念館）

★登壇者・村田信一さんからのメッセージ

―「いま、ここにいる私たち」未来へと希望を繋ぐために―

年の瀬も押し迫ったタイミングで開催された「いま、ここにいる私たち」。多くの人が参加し、平和や日本や世界の行く末に対する関心の高さ、危機感を持った人が多いことを改めて感じさせた。

関野さんの映画（※）は、人の命の大切さや異なる文化を理解することの意味などを問いかけ、見ていてとても充実感があった。また、佐藤さんの話は、イラクで 10 年にわたり活動してきた思い、また一昨年来の IS の台頭、それに伴うシリアやイラクでの戦闘激化、難民増大などの困難な状況の中で、それでも支援を継続して成果を上げていることがよくわかり、また子どもたちの様子や地域の様子などがしっかりと伝わってきたと思う。

私自身は、それほどまとまった話が出来なかったのだが、自衛隊でのことや平和の尊さ、戦争に自衛隊が参加することになると生じるリスクの話などを、少しは伝えることができた。戦争のリアルさやそこでの様子を、いままでの経験からさらに話すことが出来たらなお良かったと反省している。

今や多くの人々が、この国の行く末を懸念している。この国が中東やアフリカの利害争いの当事者になりかねないことに。中東では、争いが続く中で多くの市民たちが命を落とし、生活基盤を破壊されている。欧州では、パリでの事件だけではなく、中東からの難民の流入なども続き、より中東情勢や平和に対する危機感を強めていることだろう。

私は、昨年来若い人たちへの発信を主目的にして、何度かそういう機会をもったが、予想以上に若者たちがしっかりと物事を考えていること、将来に危惧を抱いていることを知った。この若い人たちに、これから生きていく上での指針を提示出来ることが大事だと思う。

今年は、昨年まで以上に厳しい社会情勢、世界情勢が予測されるが、私たちが情報共有し、それぞれがアクションを起こしていくことで、世界をより良くしていくための思いを繋げていきたいと考えている。

※関野さんの映画「プージェー」：探検家で写真家の関野吉晴さんとモンゴル草原に生きる少女プージェーの交流をつづったドキュメンタリー映画（2006 年、山田和也監督作品）。12 月 26 日の集会では、ダイジェスト版を上映した後に関野さんが「プージェーとその家族・15 年の歴史」と題して講演しました。

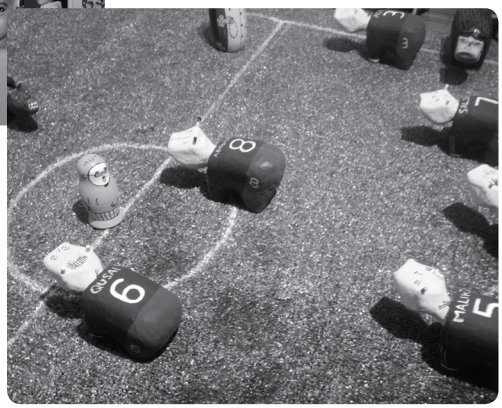
写真：左から佐藤真紀 JIM-NET 事務局長・関野吉晴さん・村田信一さん

◆いのちの花展（2016 年 2 月 12 日～ 17 日@ギャラリー日比谷）

写真下：IS の迫害から逃れてきたヤジディ教徒の子どもたちが描いてくれた絵

写真上：死んだ子どもたちの残したもの
ここにいる子どもたちは、イラクやシリアの小児がんの子どもたちです。JIM-NET が支援しましたが、治療途中で亡くなりました。中には、チョコレートのデザインを手伝ってくれた子どもたちもいます。
この子たちとの出会いは、私たちにとって、とても大切な思い出です。果敢にも、がんと闘った子どもたちは、今は天国にいます。
（ギャラリー 2 階に追悼の場をつくりました）

写真下：サッカーをする赤べこ「サカベコ」。昨年に引き続き、ギャラリー日比谷の人気者となりました。今年はチョコ色のユニフォームを着た「チョコベコ」も登場！



ヨルダン現地報告

シリア人自身の将来のために

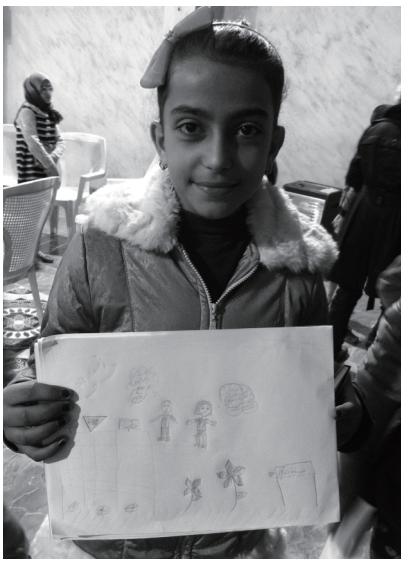
福田直美（JIM-NET ヨルダン事務所長）

◆安全に生活するために

シリア国内では、迫撃砲、ロケット弾、大砲、クラスター爆弾、地雷、簡易爆発物等による事故が、2012 年 12 月から 2015 年 3 月の間に 8 万件近く発生していると言われています。これらの被害に遭い緊急医療を受けるために難民としてヨルダンに逃れて来るシリア人が後を絶ちません。

JIM-NET は、難民がシリアに帰った時、地雷／不発弾の被害に遭わないよう、シリア人、イラク人の子どもたちを対象にワークショップを開催しました。地雷の写真を見た時の子どもたちの反応は様々です。小さな子どもたちは驚きの声を上げ、高校生からは「同じような物を家の近くで見たことがあるよ」という声も聞かれました。また、ファシリテーターの一人、ヨルダン人のサイードさんは、幼い時に地雷の被害に遭い両手を失っています。その時の話を寸劇にしながら、地雷や不発弾はどのような形をしているかわからない、不審なものを見たら近づかないように、というメッセージを伝えました。ワークショップの最後には、子どもたちが「安全のために」家族や友人に伝えたいメッセージを絵にして発表し合いました。

彼らが一日も早く、安全に、故郷に帰ることができる日が来ることを願って。



写真①：「地雷に近づいちゃだめ！」という絵を描いた女の子

◆「いつまでも誰かに頼りたくない」

2015 年 12 月に障害者の社会参加を目指した研修を終えた参加者たちが、スポーツ活動と学校での障害に関する啓蒙キャンペーンを企画しました。これらの活動は、地元ですでに活動している NGO やボランティアの協力を得ながら、そしてヨルダン人障害者と一緒に活動することにより、社会の障害に対する理解を深め障害者が生きやすい社会をつくっていくことを目的としています。

障害者スポーツ活動を率いるのは、脊髄損傷のため車いすで生活するヤヒヤさん（シリア人）です。「私は紛争で負傷して障害者になりました。これまでとは違う人生になるということは認識していますが、誰かが具体的に『こうすればよい』と教えてくれるわけではないし、いつまでも誰かに頼っていたくはないのです」と言います。

障害者が中心となり、集まって活動を計画したり、他の NGO との話し合いに出かける姿はとても生き生きとしています。自分たちの思いを自分たちの力で実現できるよう、JIM-NET は側面的に応援して行きます。

写真②：障害者スポーツを行う団体を見学

東京事務所から

『シリア・内戦と難民と人権を考える～非人道兵器の使用は許されない～』シンポジウム開催

内海旬子（JIM-NET　海外事業担当）

1 月 19 日、表題のシンポジウムが地雷廃絶日本キャンペーン主催、JIM-NET 協力で開催され、パネリストには、東京外国語大学の青山弘之さん、軍事評論家の神浦元彰さんと JIM-NET の内海、加えてコメンテーターにヒューマンライツ・ウォッチの吉岡利代さんが、既に 5 年がたとうとしているシリア紛争とそれを取り巻く問題について参加者と共有しました。

青山さんからは、いわゆる「シリア内戦」は、シリア政府側と反政権側と IS による国内勢力の三つ巴という単純構造ではなく、複数の当事者が複数の争点をあげている重層的な紛争であり、「暴力の再生産」が起こっていること、さらに紛争を長引かせているのは諸外国の関与であり、もはや「国際問題」と考えるべきだと現状が説明されました。

神浦さんは、現在シリアで使われている毒ガスは、既に第一次世界大戦時に使用されていた旧式の塩素ガスで、その被害は残酷なものであるにもかかわらず国際条約での取り締まりが難しいが、市民がその残酷さを訴えることで使用を阻止できると話されました。

内海は、JIM-NET のヨルダンでの活動から見える状況をお話ししました。ヨルダンには約 63 万人のシリア難民がいて、人口比では 9.8% に上ります。シリア紛争の長期化は受入国も援助機

関も疲弊させ、その中で負傷者や障害者はますます厳しい状況に置かれます。JIM-NET は、障害のあるシリア人難民の支援をしていますが、活動で出会う人たちはほとんど全員が「早くシリアに帰りたい」と言います。その声から、緊急支援だけではなく、紛争終結に国際社会が真剣に取り組まなければならないと痛感すると伝えました。

３人の発表を受けて吉岡さんは、人権の観点でシリア紛争を分析され、まずは「すべての関係者が民間人を保護すると表明すること」、次に「人権侵害を犯してきた人たちの責任追及」、さらに「少数派の保護」が重要な点であり、私たちにできることを考え続けないといけないと話されました。

シリアの情勢は先行きが不透明ですが、青山さんは「2016 年は終わりの始まり」と表現されました。一刻も早く紛争終結が実現するよう、国連や各国の取組み、何よりシリアで起こっていることに注目していきたいと思います。

福島支援事業報告

福島原発事故から５年、市民放射能測定所のいま

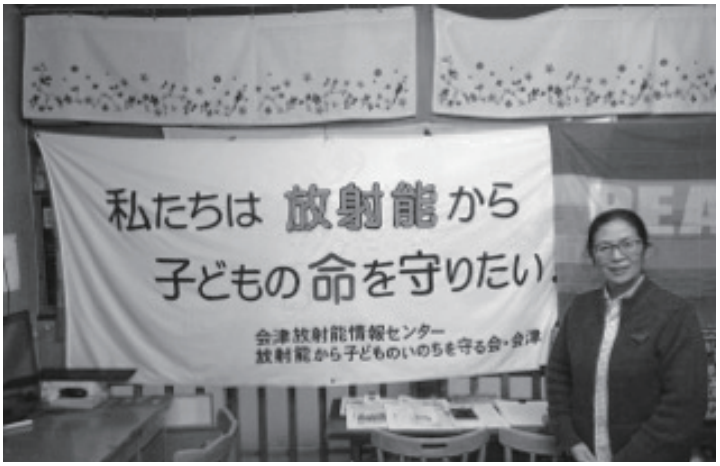
佐藤公昭・小松真理子（JIM-NET　福島事業担当）

東京電力福島第一原子力発電所が爆発してからはや５年。原子炉の中では何が起こったのか、まだ分からない状態ですが、福島の人々のうえにも、同じだけの月日が流れて、日々の営みが続けられています。

JIM-NET 福島プロジェクトのうち、「放射能リテラシー向上プロジェクト」でご一緒した市民による放射能測定所については、2014 年１月にいちど「福島市民放射能測定所ダイレクトリー」としてまとめ、広くご紹介しました（ http://jim-net.org/project/fukushima/radioactivity.php ）。その測定所のみなさんに、これまでと現在の活動の様子や今後の展望などを教えていただこうと、昨年末から県内 21 ヶ所を訪問し再度お話を伺いました。今回はその「福島放射能測定所フォローアップ」でお話いただいたことを通して、いまの福島の一端をお届けできればと思います。

まず、放射能測定に関して「実際にご自分でやってみていかがでしたか？」と聞いたところ、「大変だったけど、他の人と放射能について建設的に話すときの、コミュニケーションツールとして使える数字が出せたのでよかった」という声がありました。むやみやたらと恐れたり無視するのではなく、放射能を「見える化」して、数値に基づいて個々人が対応を決めていく基礎になったとのことでした。

市民測定所には、ざっくり言って野菜生産販売グループか否かの区別があります。原発事故で降り注いだ放射性セシウムの、土



から農作物への移行は随分予想に反して少なく、野生のきのこや山菜でなければ、最近はほとんど測定数値が ND（機械で測れる限界以下）のものが多いのですが、そんな中「測りつづけるコストも時間も厳しい」「福島県の農作物は、測ってあって当たり前、という前提があるので続けなくてはならないけれど、数値が出ないのにいつまで測定を続けなくてはいけないのか、先が見えない」と言われる生産・販売者もありました。原発の被害者である福島の農家さんにだけ、ずっと負担がかかっている現実があります。

印象的だったのは、「放射能はあるけれど、日常をとりもどすことが大切」という意見でした。いろんな不安や不仲も生まれたけれど、福島が好きでここに住む人々の日常と喜びを取り戻したいという気持ちで、「測って食べる」ことをされている団体もありました。

しかし、食品だけでなく、通学路や街中も広く測定しているお母さんたちの団体さんでは、「不安でいることを容認してもらえないことが辛い」と言われハッとしました。測定所とひとくくりにしがちですが、測定数値をもとに、多方向に活動が展開しているのです。ポツリと、「福島をなんとかしなくてはならない。除染も測定も必要だけど、でも、おいしいお酒も飲みたい」と言われた方もありました。今後ますます運営も厳しくなっていくことが予測されますが、誠実でたくましく、繊細かつ飾らない福島の市民測定所の方々に、あらためて敬意を表します。

2016 チョコ募金・ご協力ありがとうございました。

本年度も多くの募金者様に支えられ、2016 年 1 月末に受付を終了しました。

JIM-NET 代表理事・鎌田實より、皆様に感謝を込めて、御礼のサインをお贈りいたします。

チョコ募金担当者から～はらはら、ドキドキ、わくわくの2カ月～

芦澤礼子（JIM-NET チョコ募金担当）

JIM-NET の一大プロジェクト、チョコ募金。準備が始まるのは、終わった直後からです。子どもたちの絵を選び、缶としてデザイン、缶工場への入稿などなど、準備段階での作業は山のようにあります。缶を作ってくださっているのは、埼玉県草加市にある家族経営の小さな町工場。古い機械を丁寧に手入れして使っておられ、何と缶の本体のプレス作業は「足踏み」の機械で行っています。１個１個、16 万回踏んで作りだされる缶に、六花亭でチョコを詰めて（これも手作業だそうです）募金者様のお手元に届くチョコ缶が出来上がります。

受付本番の 12 月 1 日からは、事務所はてんてこまいです。16 万個のチョコを間違いなく募金者様に届けるために、少ないスタッフでフル回転。受付媒体も電話、ウェブ、FAX、郵送と多岐にわたり、特に鎌田代表のメディア出演の時は緊張がピーク！そのような中でも、募金者様の温かいお言葉、ウェブ申込に書きこんでいただいたメッセージに励まされ、おかげさまで 1 月末で終了することができました。改めて、深く感謝申し上げます。

2016 チョコ募金の缶は、「デザインが大人っぽい」と、とても好評でした。缶の絵を描いてくれたのが中学生くらいの女の子４人で、思春期の年齢だったからかもしれません。私は国内事業部なので、彼女たちに会ったことはありませんが、不思議なもので毎日彼女たちの写真を見たり、エピソードを聞いたりしていると、何だか近所か親戚の娘のように思えてくるものです。ナブラスさんが亡くなったと聞いた時は、残念でたまりませんでした。あとの３人は頑張って治療を続けていると聞き、大人になって人生を謳歌し、長生きして欲しいと祈るばかりです。

これからもチョコ募金をよろしくお願い申し上げます。

JIM-NET 新スタッフからご挨拶

初めまして、岩崎ルミと申します。

昨年 11 月から JIM-NET で活動させて頂いております。11 月からのチョコ募金の受付や２月のギャラリー日比谷でのイベントでは募金者様と直接お話しする機会があり、皆様の熱い想いに深く感動しました。毎年、継続して募金してくださる方、初めて募金してくださる方や自分のお小遣いから募金したいと連絡をくれた小学生の子どもたち。皆様の優しいお気持ちに接して、改めてイラク、シリア、福島の支援に関わることができ、大変嬉しく思います。

私自身は、大学生の頃からアラブ世界に興味を持ち、アラビア語をかじったり、現地に旅行したり（時々住んだり）しました。アラブ料理も大好きで、都内のアラブ料理レストランの食べ歩きを楽しんでいます。イラクやシリアの人々が日常生活を普通に楽しめるように、一つ一つ丁寧に支援活動をしていきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。